

## 村上春樹「図書館奇譚」論

— オスマン帝国／図書館／ボルヘス —

### はじめに

「図書館奇譚」（初出『トレフル』一九八二年六月～十一月）は、短編集『カンガル―日和』（一九八三）に収録された短編である。これまで積極的に研究はなされてこなかったが、同時期のテキストとの密接な関係性や後に発展するモチーフ・方法などに看過できない繋がりがある。特に、作中作『オスマン・トルコの収税吏の日記』に着目すると、過去（オスマン・トルコ）と現在との一体化であるだけでなく、「僕」の内的世界と歴史の融合を見いだせる。これは「ねじまき鳥クロニクル」（一九九四～九五）と重なる設定とも言え、歴史と物語に関する重要な試行と考えられる。本稿は作中作の存在をはじめとし、「図書館奇譚」を構成する要素が多くの村上テキストと連携があることを明らかにし、再評価する試みである。

＊

「図書館奇譚」の基本情報を整理しておく。「図書館奇譚」の初出は『トレフル』一九八二年六月～十一月であり、短編集『カンガル―日和』（一九八三）に収録される（V0と記す、以下同様）。『村上春樹全作品 1979～1989 ⑤』（一九九一）に収録された際には、他のテ

キーストと同様に一部手直しがなされている（V2）。ただ、この短編のみの絵本単行本化の話があり、子供向けに文章をリライトし、佐々木マキのイラストを大幅に増やして、『ふしぎな図書館』（二〇〇五）と名称変更をした形での出版がなされた（V3）。その後、『ふしぎな図書館』のドイツでの翻訳出版依頼が来るが、佐々木マキから *Menschik* へのイラスト変更要望があり、ドイツで出版される。このドイツ版を皮切りに、その他四カ国で異なるイラストレーターの絵が付された出版がなされる（米・英・伊・デンマーク）。その後、日本で *Menschik* の絵を付した『図書館奇譚』（二〇一四）が出版されるが、村上はドイツ版の原本『ふしぎな図書館』（V3）の文章ではなく、V1を加筆した本文を使用した（V4）。つまり、*Menschik* のドイツ版（およびドイツ版に依拠したテキスト群）と日本版の文章は別バージョンである。本文が四パターン、イラストが六パターンあり、更に複雑な出版経緯がなされた極めて珍しいテキストである（イラスト・バージョン等に関しては別稿で考察する）。

「図書館奇譚」のあらすじは次のようになる。市立図書館に本を借りて来た僕は、閲覧係の老人に騙され、迷路の奥にある地下牢に閉じ込められる。老人は多読の知識で満たされた脳みそを食べることが喜

山 根 由美恵

びであり、僕の脳みそを吸うと言う。牢番の羊男は僕に同情しながらも、老人への恐怖から僕を監禁する。食事は美少女が運んできたが、この美少女は僕にしか見えず、羊男は知らないという。僕は家で待つ過度な心配性である母親とむくどりのことを心苦しく思いながらも、老人の言い付けに従って本『オスマン・トルコの収税吏の日記』を読み始める。新月の夜、美少女に指示され、僕と羊男は脱出を企てた。最後のドアを開けると老人が待ち構えており、僕の恐怖の対象となっている黒い犬も僕の愛するむくどりをくわえてそこにいた。絶体絶命の状況で、美少女が憑依し巨大化したむくどりに救われる。外に逃れて気が付くと羊男は消えていた。家では母親が帰りを待っていたが、母親は何も聞かなかった。そのあと間もなく、僕は母親を亡くし、独りになった。僕は新月の闇の中で地下室のことを考えている。

本作は中地文氏がユング派の視点からの解釈―内的世界への冒険と帰還の物語と捉え、定説になっている。氏の指摘通り、地下は無意識下の寓意であろう。テキストの空間構造は、老人と出会う地下の107号室（地下一階）、長い階段（昔は井戸であった）を降りた先にある地下牢（地下二階）に分かれている。周知の通り、村上文学における井戸はイドに通じ、元型と解釈されてきた羊男や美少女が登場するのは地下二階の世界である。村上は自身の文学生成の隠喩として、無意識下を地下一階・地下二階という階層構造で語っているが、深い階層において自分自身の深淵と向き合う「図書館奇譚」はこの構造と合致している。老人が羊男に圧力をかけ、羊男が逆らえない構図は超自我とイドとの関係に通じ、羊男と美少女が協力して「僕」を老人と犬から守る展開はイドが超自我への反逆を企てた物語と見なすことも可

能であろう。私はこのようなユング解釈の有効性を首肯しつつ、内的世界への旅と〈喪失感〉が描かれたと捉える見方は、本作を村上テキストの類型に埋没させる不足感を持つ。以下、①作中作、②図書館・ボルヘスについて考察し、村上文学における本作の重要性について述べていきたい。

## 一 オスマン・トルコ―歴史との関係―

### ①オスマン・トルコという舞台設定

これまで作中作『オスマン・トルコの収税吏の日記』は考察対象となったことはないが、同年に発表された「羊をめぐる冒険」（一九八二）における作中作「十二滝町の歴史」がアイヌ青年に着目し、マイノリティからの歴史の構築を行っていることから、重要な機能を果たしていると考えられる。主人公・イブン・アルムドゥハシュールは、オスマン帝国の収税吏である。一夫多妻制のため、三人の妻がおり、裕福な生活をしている。歴史的事実として、オスマン帝国は一三世紀末から一九二二年という六〇〇年間の長い間（日本で言えば、鎌倉時代から大正時代まで）、オスマン家というひとつの王朝が実権を保ったまま統治した、世界史上でも極めて珍しい王朝である。小笠原弘幸氏によれば、オスマン帝国は四つの時代区分がある。<sup>(5)</sup>

・封建的侯国の時代（一二世紀～一四世紀）…略奪を生業とした荒くれ者たちの集団。封建諸国たちのなかの第一人者。

・集権的帝国の時代（一五世紀～一五七二）…メフメト二世による一四五三年のコンスタンティノポリス征服。スルタンを国家の頂点と

した中央集権化を進める。イエニチェリ軍団（奴隷臣下集団）を擁し、専制君主として君臨（スレイマン一世…ウイーン包囲等）。

・分権的帝国の時代（一五七三―一八〇七）…ムラト三世即位からムスタファ四世まで。スルタンに独占されていた権力が、イスタンブールの有力者たちによって分権化されていく。

・近代帝国の時代（一八〇八―一九二二）…帝国近代化の先鞭を付けたマフメト二世の治世から滅亡まで

作中作は集権的帝国の時代（オスマン帝国の一般的イメージ）のように見えるが、収税吏の話であることから分権的帝国の時代と判断できそうである。スレイマン一世の外征後、オスマン帝国は経済的な困窮に陥っていた。それまでティマール制（ムスリム戦士に、町や村の徴税権を与える代わりに、当地の治安維持をゆだねる。その見返りに戦争の際には兵としてかけつける）が主であったが、近代戦（城攻略等）が多くなったためティマール制と密接に関わるティマール騎兵の役割が縮小していた。対して、軍事力で有力であるイエニチェリ（歩兵）維持には現金が必要なため、徴税請負制を導入し、収税吏たちに取り立てを行わせた。このとき、国家に収める税額以上を取り立て、自分の収入にしてもかまわない制度にしたため、過酷な収税が行われたところもある。ハシュールが裕福な生活をしているのは、当時の収税吏の生活と合致している。また、舞台がバグダッドであることに目を向けてみると、バグダッドは一五三四年…スレイマン一世のオスマン帝国、一六二三年…アッバース一世のサファヴィー朝、一六三四年…ムラト四世のオスマン帝国というように支配者が二転三転している。そのためオスマン帝国の収税吏が常態化される状況は一六三四年

以降と考えるのが妥当である。

オスマン帝国の納税政策という視点は、ティマール制から徴税請負制への変更（スルタン専制→分権体制という政治形態の変動とも関わる）という帝国の歴史の転換点に関わっている。オスマン帝国の納税政策を知りたいと考えた「僕」という設定は、知識に満たされた脳味噌を食べるの喜びとしている老人にターゲットにされる十分な理由付けとなっている。

村上は世界史に強い関心があった。二〇一〇年のインタビューでは「中央公論社の『世界の歴史』なんかおもしろくて、中学から高校にかけて全巻何度も繰り返し読みました。だから世界史の試験はとくにわざわざ勉強する必要もなかったです」と述べている。中央公論社『世界の歴史』におけるオスマン・トルコの記述は少ないが、まとまって記されている項は次のようなものとなっている。

一四五三年のオスマン・トルコのスルタンⅡムハَمَّد二世によるコンスタンティノープルの占領とそれに続く東ヨーロッパへの侵入は、東方勢力の西方進出の最後のものではあった。コンスタンティノープルの占領後、トルコはさらに西方に進出し、一四七五年にはクリミア半島を併合し、エーゲ海の島々や、一時的ではあったがイタリアの一部を占領した。

スレイマン大王の時代になると、トルコのバルカン半島攻撃がはじまった。一六世紀の前半にはベルグラードを取り、またハンガリー王ルイの兵を破って、これらの地をオスマン帝国の領土に併合した。ただウイーンは長期にわたる包囲にたえ、遂にトルコ

軍に降らなかった。他方、スレイマンは北アフリカにも遠征してスペイン軍を破り、この地方のイスラム教徒をオスマン帝国の傘下に収めた。

スレイマンが征服したヨーロッパの国々は、その後およそ一世紀にわたってトルコの支配下にあった。ウェストファリアの講和（一六四八年）後における東ヨーロッパの地図は、トルコの勢力がクリミア半島からほとんどウィーンまでの広大な地域をおおっていたことを示している。

トルコ人はヨーロッパの征服地の住民に対してかならずしもイスラムへの改宗を強制しなかったが、ただキリスト教徒を社会階層としてイスラム教徒の下においた。ハンガリーを除いて他の国々では、住民のかなり多数がイスラムに改宗し、とくにボスニア、ブルガリア、アルバニアの改宗者は狂信的で、同一種族に属するキリスト教徒に迫害を加えた。

トルコ人の支配下におかれた東ヨーロッパの諸民族は、宗教的理由からトルコ政府に抵抗したが、それ以上に彼らの反抗をあとにたてたのはその悪政であった。政府は併合した領土の統治よりは、新しい軍事的活動に熱心で、地方の行政は地方官にまかせきりであり、そのため地方行政の腐敗ははなはだしく、被征服民は非常に重税とさまざまな種類の搾取に苦しめられた。<sup>(7)</sup>

中央公論社版『世界の歴史』のオスマン帝国に関する記述はヨーロッパ寄りの目線で、「征服」「迫害」「搾取」という用語や項の見出しが「オスマン＝トルコ人の暴政」といったややネガティブな記載とな

っている。作中作の主人公は収税吏であるので「地方行政の腐敗ははなはだしく、被征服民は非常に重税とさまざまな種類の搾取」を行う側であるが、それはヨーロッパ・キリスト教目線からの判断である。

ハシュールは物静かな人間で、妻子やペット（インコ）を愛する人間として性格づけられ、ここでは当時のイメージに反する物語が創り上げられている。「羊をめぐる冒険」におけるアイヌ青年から見る歴史と通じる、当時の本流とは違う物語を構築する意識が見られる。

なお、テクストの読解には直接関わらないが、オスマン帝国の特徴として多民族・多宗教国家であることに触れておく。小笠原氏は次のように述べている。「兄弟殺しやデヴシルメ、現金ワクフ、そしてムスリムと非ムスリムの平等など、イスラム法を厳密に適用すれば容認しえない行為を、イスラムの名のもとに実践していたのがオスマン帝国であった。オスマン帝国がおかれた状況にふさわしく、カスタマイズされつつ適用されたイスラムは、いわば「オスマンのイスラム」というものである」と、「こうしたイスラムの在地的変容は、オスマン帝国に限らず、歴史上、イスラム世界の各地で確認しうる現象である。しかし、オスマン帝国が他のムスリム諸王朝と一線を画する特異性は、そうした歴史性のなかでつくられた国家が、六〇〇年間の長きにわたり存続し、四〇〇年間スンナ派イスラム世界の盟主としてふるまい、一〇〇年間西洋近代といかに折り合いをつけるか苦闘しつつ一定の成果を挙げたという経験と実績にある」。オスマン帝国は領土が拡大するに従い複雑化する民族・宗教について、在地ごとに「イスラム」教義を変容させ適応させてきた。多民族多宗教の共生の一つのあり方であると、現在その価値が見直されているようである。「オスマンのイスラム」という「イスラムの在地的変容」は、村上文学の

世界的享受の様相と図らずも類似性を持っている。

## ②地下での読書行為

僕が地下二階の地下牢で行う読書行為は現実世界とは違った体験となっている。『オスマン・トルコ収税吏の日記』は古トルコ語で書かれた難解な本だったが、不思議なことにすらすらと読むことができた。おまけに読んだページは隅から隅まで頭の中に記憶された。頭が良くなるというのは実に素敵な感覚だ。理解できないことは何ひとつない。脳味噌をちゅうちゅうと吸われてもいいから、たとえ一カ月だけでも賢くなりたいと願う人々の気持はわからないでもなかった<sup>(9)</sup>（二〇六頁）。ここでの読書は、どんな難解な内容もすべて理解できるという知識欲を完璧に満たすものである。その上で、僕は主人公（ハシジュール）と一体化する。ハシジュールには三人の妻があり、その中の一人が美少女と重ねられている。フーコーは図書館と読書行為について、「静まり返った図書館のなかで、念入りに翼を抜けている、そして列柱をなす書物、整然と居並ぶ表題、かずかずの書棚は、図書館をくまなくふさいでいながら、他方では、不可能の世界へとぼっかり口をあけている。空想的なものが宿るのは、書物とランプのあいだである。もはや人は幻想的なものを心のなかにもち運ぶのではない、それを自然界の突飛な出来事のうちに期待するものでもない。それは、知の正確さのなかから、汲みあげられるのだ。富は資料のなかで待機している。夢見るためには、目をつぶるのではなく、読まねばならない。ほんもののイマージュは、知識なのである。」と述べている。夢見るためには読書行為が必要で、それによって「ほんもののイマージュ」が生み出される。「僕」はハシジュールになることで間接的な形で美少女と肉体

関係を持つが、それは僕の無意識の願望―母の支配から逃れ、理想の恋人と暮らす―イマージュの具現化とも言える。

しかし、この甘美な読書行為は、その後に脳味噌を吸われることを忘れさせるいわば麻薬的な行為でもある。また脳味噌を吸われた後も、「残りの人生をぼんやりと夢見ながら暮らすわけさ。悩みもなきや、苦痛もない。イライラもない。時間の心配をしたり、宿題の心配をしたりしなくてもいいんだ。どうだい、素敵だろう？」（二〇七頁）といった苦しみのない生を送る設定になっている。諸氏が指摘するように、これは心（影）を切り離し、死なせることで永遠の平穏な生を送る「世界の終り」と強い類似性を持ち、オウムのマインド・コントロールにも近い。このような自らのイマージュの世界に溺れたまま脳味噌を吸われ、廃人同然の人生を送る可能性を美少女が阻止する。美少女は「僕」の脱出の段取りを付け、最後犬に襲われそうになった際にはむくどりと一体化し、犬を倒す。山崎眞紀子氏が述べているように、美少女はアニメとしての側面があるため、自らを犠牲にしても破壊を阻止するよう動くのであろう。本作は甘美でかつ苦しみを麻痺させる生の提示とそこからの脱出というテーマが盛り込まれている。村上は初期の段階から自らのイマージュの世界に溺れた苦痛のない生の提示とそれを回避させる物語を描いており、村上文学を通底する重要な倫理観であることを指摘しておく。

## ③月とオスマン・トルコ―

テキストは新月―太陽と月が重なることで月が全く見えない状態―の闇の中での脱出劇がクライマックスとなっている。作中作では新月の前段階の細長い月が描かれている（「夜空には剃刀のように細い月



が浮かんでいた」、「とても良い月です」彼女は言った。〈明日は新月です〉、「剃刀の月の光が彼女の体にわけのわからない光を投げかけていた」以上全て二一四頁）。トルコの国旗には三日月と五芒星が描かれているが、トルコだけでなくイスラム国家の国旗の多くに月と星が描かれている。イスラム文化圏では月に關して様々な伝説があり、オスマン帝国においても、始祖オスマン一世と月の逸話がある<sup>10)</sup>。

ある日、オスマンは、アナトリア北西部の町ビレジクで聖者として知られるエデ・バリの館に客人となっていた。夜半、オスマンは夢を見た――

聖者エデ・バリの胸から月が生まれ、その月がオスマンの胸中に入った。すると、彼の臍から樹が生え、その陰が世界を覆った。その陰のもとに山々があり、山麓から水が湧いた。この湧水を、ある者は飲み、ある者は庭水に用い、またある者は泉に注がせていたのであった。

オスマンは眠りから覚めると、エデ・バリにこの夢の内容を伝えた。それを聞いたエデ・バリは、娘をオスマンに娶せた。夢解釈によれば、両者が結婚することで、オスマンが世界を支配し、人々が平穩を得ると見なされたからである。

実際にオスマンがエデ・バリの娘と結婚したかは定かではない。また、オスマンのあとを継いだオルハンの母は、経歴不詳のオメル・ベイという人物の娘であり、エデ・バリの娘ではなかった。しかし、エデ・バリが地域の人々の敬意を集める名士にして

聖者であり、彼が早い段階からオスマン集団に力を貸していたのは確かである。エデ・バリに代表される神秘主義的な宗教指導者は、神秘主義の修行僧や都市の同胞団<sup>デルヴィシユ</sup>と深いつながりを持っており、彼らを動員することでオスマン集団の初期の征服活動に大きな戦力を提供したと考えられる。

オスマン一世は聖者（エデ・バリ）から生まれた月が自らの体に入り、樹が生え、世界を覆った夢を見る。聖者は帝国支配の予知夢と捉え、自らの娘を娶らせたという伝承である。オスマン帝国にとって月は力の象徴と言え、その伝統を受け継いだトルコ国旗に月が描かれるが、満月ではなく三日月となっている。作中作では美少女との寝室シーンにおいて「剃刀のように細長い月」が描かれていたが、それはトルコ（イスラム）の世界やオスマン一世と妻に關する伝承を想起させる。

本作の新月は、「僕」には影響はないが、異界の住人たち（老人・美少女）には作用する。老人は新月の時にしか眠らず、美少女は体が半透明になり、気分が優れない。地下の住人たちはオスマン帝国の象徴と重なるように、月が力の源泉と言えそうである。また、新月では「闇」が意志を持つかのような描写がなされる（「深いインク・ブルーの闇は重い鉄扉と迷路を抜けて、僕のまわりを音もなくとりかこんでいった」二一五頁）。「扉のむこうから完全な闇が柔らかな水のように押し寄せてきた。新月が空気の調和を乱しているのだ」二二四頁）。この新月の闇の移動で「僕」は母に対しての冷静な眼差し（疑問・不信感）を覚醒させており、ある種の成長を遂げている。それは「いろ

んなことがはつきりする」（二二五頁）力を有した新月の効果として描かれている。

しかし、「僕」は美少女（むくどり）に犬を退治してもらい、自分は逃げ、元型とも言える美少女や羊男と離れた。更に母に地下室で起きた真実を話し合うことがないまま死別を迎える。「闇の奥はとても深い。まるで新月の闇みたいだ」（二三一頁）という結尾から、「僕」は異界に繋がる新月の影響が今後も及びそうな闇の中に一人取り残されており、そこから脱出する未来が見えない。孤独であり、闇落ちへの危険性を感じさせるデータツチメントが際立つた結末となっている。

作中作『オスマン・トルコの収税吏の日記』は、僕が老人のターゲットになる必然性やイマージュの世界に溺れる危険性、イスラム世界を想像させる細長い月と闇の中の脱出劇というテクストの舞台設定として重要な働きをなしている。ただ、描写は美少女との繋がりが主で、世界の広範化・深化には及んでいない。本作では内的世界と歴史とが有益に連関する作を描くまでにはまだ力不足であったと言えるが、ここでの試みは「ねじまき鳥クロニクル」における歴史と物語の融合―ノモンハンと久美子・亨の闇が一体化し、「悪」の具現化である綿谷昇を消滅させる物語―へ展開するものと考えられる。

## 二 図書館という「場」<sup>トボス</sup>

### ① 暴力性を有する「場」<sup>トボス</sup>としての図書館

次に、本作の中心を担う図書館と羊男について考察する。本作の図書館は、過去の「知」の結晶である「本」を財産と捉え、貸し出すだけだと図書館は搾取されて続けている状態（損）であるため、生贄を

選び、脳味噌を吸うことで「知」を取り戻している設定である。佐藤敬子氏<sup>15</sup>が挙げているユネスコ公共図書館宣言において、公共図書館とは「その利用者があらゆる種類の知識と情報をたやすく入手できるようにする、地域の情報センターである。公共図書館のサービスは、年齢、人種、性別、宗教、国籍、言語、あるいは社会的身分を問わず、すべての人が平等に利用できるという原則に基づいて提供される。理由は何であれ、通常のサービスや資料の利用が出来ない人々、たとえば言語上の少数グループ（マイノリティ）、障害者、あるいは入院患者や受刑者に対しては、特別なサービスと資料が提供されなければならない」<sup>16</sup>施設であり、公共性に基づき運営されている。図書館の「知」の公開を「損」（搾取）と捉える考え方は、資本主義的見解―資本回収・リターンを求める―と言えよう。平野芳信氏は村上文学における図書館を「過去と未来という時間を結合するインターフェイス」<sup>17</sup>と捉えたが、この性質を合わせて考えてみると、図書館の「知」は過去と現在を結び、それを未来に活かすものであり、大きな流れで言えば「知」の継承と文化・文明の発展というリターンをもたらす。しかし、本作の図書館は短いスパンで、かつ具体的な形のリターンを求めている。公共性を否定し、資本主義の考え方で運営され、前近代的でかつ暴力的な方法で資本回収を行っているということになる。搾取に対するリターンを求めるならば、生贄ではない形でも可能である。別稿で本作には対大江意識としての「神隠し」要素があると述べているが、「神隠し」という説話的な要素と前近代的な生贄の設定が加わることで不条理性を強める効果がある。つまり、本作の図書館は近代性と前近代性が混合した「場」<sup>トボス</sup>としての異界として設定されている。

説話や前近代的要素は、羊男という存在からも補強されている。羊

男はこれまで主人公の弱い面を司る元型として捉えられてきたが、村  
上は「羊をめぐる冒険」の羊男について次のように述べている。

村上 ええ、羊男つてのは、ぼくはいちばん気に入ってるんです  
よ。あれは、なんて言うか、『地霊』みたいなものをイメージし  
て書いた——もちろん、いろんな要素があつて一言では言えない  
けれど、そういうものを意識して書いたんですけれどね。ぼくの場合、  
都会的な小説というふうにかテゴライズされてるけど、でも  
ね、都会的なものを意識すればするほど、その対極にあるものが、  
どうしても浮かび上がってくると思うんですよ。だからある種  
の地霊的なものに、すごく興味がありますね。民俗学とかね。  
柳田国男というのは、ぼくはそれほど好きではないけど、たとえ  
ば万世一系の天皇制以前の、大和朝廷が支配する以前の日本につ  
いて、五木寛之さんの『戒厳令の夜』なんかに出てきますよね。  
ああした世界にはすごく興味がありますね。<sup>17</sup>

既に平野氏が「羊をめぐる冒険」と本作の近接性を指摘しているが  
（「あれだけの長さの『羊をめぐる冒険』が「群像」に一挙掲載とい  
う形で発表されたのは昭和五七年の八月のことだった。『図書館奇譚』  
の連載は同じ年の六月から十一月である。いわばもう一つの世界で  
「僕」は羊男に図書館で出会っていたのだ<sup>18</sup>）、極めて近い時期に描  
かれた二作の羊男の性質に類似性があると考えても不自然ではないだ  
ろう。私は本作の羊男に、暴力性を有する「場」<sup>トボス</sup>としての図書館に  
付随する地霊的な要素（地上に出たら消えていた）を指摘したい。羊  
男が図書館の暴力性を僕に教示するのは、多くの地霊が表象する現実

世界とは違った価値観を提示し、現実世界を逆照射する存在であるか  
らと考える。それは「都会的なものを意識すればするほど、その対極  
にあるものが、どうしても浮かび上がってくると思うんですよ」と  
いう意識（都会を近代的意識（資本主義や公共性）と捉えた場合）と  
一致すると思われる。

村上は泉鏡花や宮沢賢治の寓意性に惹かれていた（ただ、戦後の  
日本の小説にはそういうのが（引用者注 寓話性）少なすぎるんじや  
ないかな。この前、泉鏡花の『高野聖』っていうの読んだんですけど、  
あれなんか面白いですね。それと、やはり最近読んだんだけど、宮沢  
賢治の『どんぐりと山猫』つての、とても楽しかった<sup>20</sup>）。近代性の  
中に前近代の物語要素を導入し、どちらかに偏るのではなく混合した  
世界を創り上げるのが村上文学の特徴と言える。

## ② ボルヘスとの関係

ところで、野谷文昭氏は本作をボルヘスへのオマージュと捉えてい  
る（『習作集』でも呼ぶべき『カンガルー日和』に収録された小品の  
中に、「図書館奇譚」というのがあるが、ウンベルト・エコが『薔薇の  
名前』という壮大なゴシック小説をボルヘスにオマージュとして捧げ  
たとすれば、「図書館奇譚」はきわめてささやかなオマージュと見る  
こともできる。もともとそれはベースを通じての間接的なものかも  
しれないのだが。しかもそれは、『世界の終りと……』や後の『ダン  
ス・ダンス・ダンス』の部分的習作でもある。このことは村上春樹が、  
語り口を考える上でボルヘスに学んでいることをおそらく示してい  
る<sup>21</sup>）。

拙稿で述べたが、「踊る小人」（一九八四）において対ボルヘス意識



が確認でき、その他でもボルヘスの影響が指摘されている。<sup>(23)</sup> ここで図書館という同じ要素があるボルヘス「バベルの図書館」<sup>(24)</sup>について触れておく。ボルヘスは図書館を「宇宙」と捉えている（「他の者たちは図書館と呼んでいるが」宇宙は、真ん中に大きな換気孔があり、きわめて低い手すりで囲まれた、不定数の、おそらく無限数の六角形の回廊で成り立っている」（一〇三頁）。この図書館（宇宙）は「中心が任意の六角形であり、その円周は到達の不可能な球体である」（一〇五頁）といった、到達不可能な永遠性を有している。

第一に、図書館は永遠を超えて存在する。世界の未来の永遠性を直接的な帰結とするこの真理を、いかなる合理的な精神も疑うことはできない。不完全な司書である人間は、偶然もしくは悪意ある造物主の作品なのだろう。（一〇五頁）

わたしはいま無限のと書いた。ただ修辭上の癖でこの形容詞を加えたわけではない。世界は無限であると考えるのは非論理的ではない、といたいのだ。世界は有限であると判断する者たちは、遠く離れた場所では、回廊や、階段や、六角形などが思いがけず消えている——これは不合理なことだ——と仮定する。世界には限界がないと想像する者たちは、本の可能な数はかぎられていることを忘れる。古くからのこの問題について、わたしはあえて以下の解答を提出したい。図書館は無限であり周期的である。どの方向でもよい、永遠の旅人がそこを横切ったとすると、彼は数世紀後に、おなじ書物がおなじ無秩序さでくり返し現われることを

確認するだろう（くり返されれば、無秩序も秩序に、「秩序」そのものになるはずだ）。この粋な希望のおかげで、わたしの孤独も華やぐのである。（二一五―二一六頁）

図書館はただの本を収めた施設ではなく、神や永遠性を感じさせる特別な「場」<sup>トポス</sup>である。このような図書館の持つ超越性・無限と人間の生の有限さという対比構造は、「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」や「海辺のカフカ」における図書館と通じる。ボルヘス文学について寺尾隆吉氏は「リアリズムの要素や人間的要素を極限までそぎ落とす」特徴があり、当時のアルゼンチンの経済危機——一九二九年からはじまる世界恐慌の煽りを受けた「忌まわしい十年」——と合わせて次のように述べている。

『伝奇集』に収録された短編は、膨大な知識と冷徹な論理を支えに、日常生活からかけ離れた規則と論理に支配された空想世界を突きつけることで、読者の世界観を揺るがし、現実世界に対する疑念を引き起こす。知的遊戯と言ってしまうとそれまでだが、その根底にあったのは、完璧なプロットに貫かれた純粹フィクションの構築によって、アルゼンチンの危機的現実にかわる絶対確実な秩序を得ようとする一途な思いだった。

その意味では、人間的要素を極限まで排したボルヘスの短編は、非人間的な文学ではなく、自らの生きる脆弱な現実世界をさらに揺るがせてその基盤を崩し、逆説的なかたちで不安を乗り越えようとする人間的な感情の表れだったと言えるだろう。（五九―六

〇頁)

寺尾氏の述べる、非現実設定を入れることで「逆説的なかたちで不安を乗り越えようとする人間的な感情」を表す点は、村上文学と近接性を持つている。ただ、氏の指摘通り「バベルの図書館」をはじめとするボルヘスの世界は人間的な要素が希薄である。本作では母との関係・美少女との愛・脳味噌をすすられるという土着的な設定があり、ボルヘスよりもルゴーンネスの世界観に近い（ただしルゴーンネスの邦訳は一九八九年が初発なので、直接的な影響はないと思われる）。ルゴーンネスは「ホルヘ・ルイス・ボルヘスやアドルフ・ヒトラー・カサレス、フリオ・コルサタルを中心とする「ラプラタ幻想文学」の源流に位置する作家」<sup>(26)</sup>であり、美女がもたらす不可思議な死・魔術と科学の融合・生贄などの要素が盛り込まれた幻想文学が展開されている。ボルヘスが師と仰ぐ作家であるため、間接的に関わっている可能性があるかもしれないが、ここではルゴーンネス文学の翻訳・解説をしている大西亮氏が述べる幻想文学の特質について触れておく。

ただひとつ言えるのは、幻想文学はリアリズム文学の一変種にほかならない、ということである。一見現実からかけ離れた世界を描いているにもかかわらず、というよりもむしろ、現実からかけ離れた世界を描いているからこそ、通常のリアリズムの手法によつては見えてこないある種の「現実」を明るみに引き出す。幻想という虚構を通してのみ到達することのできる現実の層があるということ、要するに、現実世界を裏側から照射するものとしての幻想文学という視点を私たちは忘れるべきではないだろう。幻想

文学は、現実を覆すのではなく、現実を拡張するのである。<sup>(27)</sup>

大西氏の述べる幻想文学の「通常のリアリズムの手法によっては見えてこないある種の「現実」を明るみに引き出す」、「現実を覆すのではなく、現実を拡張する」性質は、村上文学を言い表す上でも至言である。「図書館奇譚」は、永遠性を感じさせる特別な「場」<sup>トポス</sup>である図書館というボルヘスのモチーフを、アルゼンチン幻想文学（ルゴーンネスやコルサタルなどラプラタ幻想文学とも言われる）に近い描写とユング的無意識の世界を重ね合わせた設定を用い、対大意識としての英雄にならない主人公の物語が描かれている、初期村上文学の実験作と判断できそうである。

### おわりに

「図書館奇譚」はこれまで注目されることが少なかった短編だが、村上が三度も手直しを試みていることから、特別な思いを持ったテキストであると言えよう。基本構造としては、諸氏の述べる内的世界への冒険と帰還の物語であり、村上のな（喪失感）が描かれていると捉えられてきた。本作の異界は図書館の近代性と生贄を要求する設定にすることで、近代と前近代が混合した異界となっており、その点にオリジナリティがある。また、簡条書きで示したが、村上文学の多くの作と類似性を有し、その意味でも重要なテキストであると考えられる。

・同短編集『カンガルー日和』との関係…「鏡」（異界・元型と出会っても成長しない主人公）、「五月の海岸線」（前時代の価値観への

反発)、「駄目になった王国」(滅び)

・同時期の作との関係…「羊をめぐる冒険」…羊男・作中作・通過儀礼の完遂の回避、「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」

…図書館・自我を失って平穏な生を送ることへの警鐘。

・後に発展するモチーフ…美少女像…「ダンス・ダンス・ダンス」(ユキ)、「1Q84」(ふかえり)、内的世界と歴史との関わり…「ねじまき鳥クロニクル」、図書館(「海辺のカフカ」)

ただし、これらの要素が有機的に結びつき深い世界観が描かれているか、作として出来が良いのかと言われれば疑問符も付くだろう。ここではその後の世界で展開する重要なモチーフの源泉や試行を評価すべきではないだろうか。

\*テキストは『カンガルー日和』(平凡社・一九八三)を使用した。

\*本稿は第16回村上春樹とアダプテーション研究会(二〇二二年四月十六日・山口大学・オンライン発表)における発表「村上春樹「図書館奇譚」「ふしぎな図書館」論―神隠しと対大江意識―」を基にしている。席上多くの有益な意見を賜った。記して御礼申し上げます。また、本稿は科学研究費補助金(研究課題番号 22K00320)による成果の一部である。

注

(1) 中地文「「図書館奇譚」母なる闇への郷愁」『國文學』一九九八・二臨時増刊)

(2) 山崎眞紀子氏は次のように述べている。「この作品をすでに指摘されている通りユング的に読み取ると、老人が老賢人、羊男がアニムス、美少

女がアニマとなろう。そして、美少女が「僕」の理想や知恵や勇気を、羊男が「僕」の弱い心を表していると読み取れる。「僕」が地上に脱出に脱出し終えたとき、羊男は姿を消した。無理だと思っていた牢獄からの脱出を「僕」が完遂したときに、羊男Ⅱ「僕」の弱い部分は消え去ったのである」(「羊男」論―『羊をめぐる冒険』『ダンス・ダンス・ダンス』を中心に)『国文学解釈と鑑賞 別冊』二〇〇八・一、一七〇頁。美少女が「アニマ」である解釈は有効と思われるが、暴力で支配し、騙したりする老人が「老賢人」、羊男が「アニムス」である解釈には疑問。「アニムス」は女性を持つ男性像という認識なので、「アニムス」ではないのではないか。羊男が僕の弱い部分の形象と呼べる部分は首肯できる。

(3) 村上春樹『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』(文藝春秋・二〇

一〇)「人間の存在というのは二階建ての家だと僕は思っているわけです。一階は人がみんな集まってごはん食べたり、テレビ見たり、話したりするところです。二階は個室や寝室があって、そこに行って一人になって本読んだり、一人で音楽聴いたりする。そして、地下室というのがあって、ここは特別な場所でいろんなものが置いてある。日常的に使うことはないけれど、ときどき入って行って、なんかぼんやりしたりするんだけど、その地下室の下にはまた別の地下室があるというのが僕の意見なんです」。「暗闇の中をめぐる」、普通の家の中では見られないものを人は体験するんです。それは自分の過去と結びついていたりする、それは自分の魂の中に入っていくことだから。でも、そこからまた帰ってくるわけですね。「いわゆる近代的自我というのは、下手するとういか、ほとんどが地下一階でやっているんです、僕の考え方からすれば。だからみんな、なるほどなるほどと、読む方はわかるんです。あ、そういうことなんだなって頭でわかる。そういう思考体系みたいなのができあがっているから。でも地下室二階に行ってしまうと、これはもう頭だけでは

- 処理できないですよね」。(九八～九九頁)
- (4) 山根由美恵「マイノリティから見る歴史―「羊をめぐる冒険」―」(『村上春樹 物語』の認識システム)(若草書房・二〇〇七)
- (5) 小笠原弘幸『オスマン帝国 繁栄と滅亡の600年史』(中公新書・二〇一八、一〇～一三頁)
- (6) 「村上春樹ロングインタビュー」(『考える人』二〇一〇・夏号、二五頁)
- (7) 引用は『世界の歴史5 聖域とイスラム』(中公文庫・一九七五、三八六～三八七頁)。中公文庫版は昭和三十六年四月に刊行された中央公論社『世界の歴史』を文庫版に縮小したものであり、村上が読んだ版の内容と一致すると判断できる。
- (8) 注5に同じ。二九一頁。
- (9) ミシェル・フーコー『ミシェル・フーコー文学論集2 幻想の図書館』(哲学書房・一九九一、一九頁)
- (10) 宮脇俊文「村上春樹全仕事」(『村上春樹ワンダーランド』イソップ社・二〇〇六)は「図書館」、「地下」、「暗闇」、そして「羊男」など、村上作品のキーワードがここにも多く見られる。長編『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を思わせる作品である(一一六頁)と述べている。同様に平野芳信氏も「街と、その不確かな壁」と「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」との繋がり指摘している。
- (「君は暗い図書館の奥にひっそりと生きつづける」『国文学解釈と鑑賞 別冊』二〇〇八・一)。
- (11) 注2に同じ。
- (12) 注5に同じ。三二一～三三三頁。
- (13) 佐藤敬子「移動する「ぼく」と待機する「老人」―村上春樹・佐々木マキ『ふしぎな図書館』論―」(『村上春樹研究叢書 村上春樹における移動』淡江大学出版中心・二〇二〇)
- (14) <https://archive.ifa.org/VII/s8/unesco/japanese.pdf>
- (15) 平野芳信「君は暗い図書館の奥にひっそりと生きつづける」(『国文学解釈と鑑賞 別冊』二〇〇八・一、一五八頁)
- (16) 山根由美恵「村上春樹「図書館奇譚」論―神隠しと対大江意識―」(『国文学攷』二〇二二・一二)
- (17) 注2に同じ。
- (18) 村上春樹「村上春樹 「羊をめぐる冒険」〇ぼくらのモダン・ファンタジー」(『幻想文学』一九八三・四、九頁)
- (19) 注15に同じ。一五六頁。
- (20) 村上春樹「私の文学を語る」(『カイエ』一九七九・八、二〇八頁)
- (21) 野谷文昭「村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論―「僕」と「私」のデジャヴ―」(『国文学』一九九五・三、五四頁)
- (22) 山根由美恵「村上春樹「踊る小人」論―ボルヘスの影―」(『国文学攷』二〇一一・三)
- (23) 村上とボルヘスの関係については、注21の野谷文昭氏、注22の拙稿、ダルミ・カタリン「村上春樹と魔術的リアリズム―「踊る小人」に見る一九八〇年代―」(『近代文学試論』二〇一四)がある。
- (24) 引用はJ. L. ボルヘス『伝奇集』(岩波文庫・一九九三)による。以下、同書からの引用は丸括弧に頁数の形で示す。
- (25) 寺尾隆吉『ラテンアメリカ文学入門』(中公新書・二〇一六、五八頁)。以下、同書の引用は頁数を丸括弧で示す。
- (26) 大西亮「解説」(ルゴーン『アラバスターの壺／女王の瞳 ルゴーン『幻想短編集』(光文社古典新訳文庫・二〇二〇、二八一頁)
- (27) 注26に同じ、三二九～三三〇頁。
- (28) 注16に同じ。(やまね ゆみえ、山口大学講師)